

少子高齢・過疎化における通過儀礼の変遷

—「日本で最も美しい村」山形県最上郡大蔵村を事例として

尤 銘 煌
(社会学)

苗 択 遠
(社会学)

山形大学紀要（人文科学）第17巻第3号別刷
平成24年（2012）2月

少子高齢・過疎化における通過儀礼の変遷 —「日本で最も美しい村」山形県最上郡大蔵村を事例として¹

尤 銘煌²
(社会学)

苗 択遠³
(社会学)

一、はじめに

人間が生まれてから多種多様な通過儀礼を通じて、一生を送っているのである。妊娠している時の帯祝いから、誕生祝い、宮参り、食い初め、初節句、初誕生、七五三、成人式、そして結婚式、厄払い、長寿祝いなど、最後に葬式で人の一生を終焉する。通過儀礼は、われわれの成長、健康、繁栄を祈り、厄払いを行うのみではなく、伝統や道徳の伝承、親族、社会関係の確認、宗教関係を顯す、元気をつける、地域の活性化などいろいろな役割と機能を持っている。また、通過儀礼は、季節の変化による毎年繰り返している年中行事と異なって人の生涯を通してほとんど一生に一度しかない各通過儀礼は人間を生きるために不可欠であるとも言える。言いかえれば、通過儀礼の調査研究は、民族における存在の根底に迫るし、人間の生き方、即ち、「死生観」を考え見直す機会が得られる。

「通過儀礼というのは個人の年齢、身分、状況、場所などの変化や移行の際に社会とともに行われる一連の儀式であって人生の過程の中に特に命が危険の状態に置かれた時に伴って作った儀礼でもある」と1908年にフランスの大民族学者ジェネップ (Arnold van Gennep) により「通過儀礼 (les rites de passage)」という言葉が最初に提出された。⁴ 日本では、井之口章次は通過儀礼が靈魂信仰の中で位置を、家族、親族関係、もっと広い社会関係の三点にしほって考えた。氏によると「人生儀礼の各段階は絶えず靈を更新する必要があった。そうしてその場合に、前の段階の存在が否定され（殺され）、新しく次の段階に生まれ変わる儀式を伴うことがある。模擬的に人を殺し、新たに誕生した形をとるのである。」⁵ 通過儀礼の重要性は国内外の学者から出された理論も既に証明されている。

一方、総務省は2011年5月2日、全国の子どもの数（15歳未満）が4月1日現在の推計で、

¹ 本稿は、結婚儀礼のまとめを苗が、他は主に尤が担当した。

² 山形大学基盤教育院 准教授

³ 吉林大学外国语学院日語語言文学専攻 修士課程

⁴ アルノルト・ファン・ヘネップ著、綾部恒雄、綾部裕子訳『通過儀礼』、弘文堂、1995、pp.3-4.

⁵ 井之口章次『講座日本の民俗3－人生儀礼』有精堂、1978、p. 2.

1年前から9万人減の1693万人になったと発表した。30年連続の減少で、過去最低を更新した。総人口1億2797万人のうち子どもが占める割合は37年連続で低下し、過去最低の13.2%となった。子どもの割合は新興国では20~40%台が一般的である。主要国でもドイツは13.5%、韓国16.2%、中国18.5%、米国20.1%で、日本は世界的にみても最低水準にある。⁶ 反対に65歳以上の高齢者率は23.2%と過去最高であった。少子高齢化により地方の深刻化する過疎が一層顕著になった。⁷ 少子高齢・過疎化で古くから伝えられてきた村の伝統風習である通過儀礼における相互扶助の機能がだんだん失われて通過儀礼の希薄と衰退に拍車をかけて社会に大きな影響を持たらされている。

大蔵村は美しい田園風景をはじめとして「日本で最も美しい村」連合に加盟している。⁸ ここで大蔵村の少子高齢・過疎化における通過儀礼の変遷を考察したい。本調査報告は、主に山形県最上郡大蔵村の肘折で行った聞き取り調査を基にしたものである。

二. 大蔵村の概要

1. 気象・地理と生活環境

総面積が211.59キロ平方メートルである大蔵村は地域の85%を山林が占める典型的な山村である。清水集落を中心として美しい田園風景に27の集落が分布している。特に四ヶ村地区の棚田は「日本の棚田百選」にも選ばれた。江戸時代には、肘折集落は出羽三山の登拝道として参詣客が大変賑わっていた。現在では、湯治の里として湯治客と観光客に親しまれている。

山形県の真ん中あたり最上地域最南端に位置する大蔵村は、南北に細長く、村域の大半が月山・葉山の山岳地帯に位置している。冬の期間では、非常に大雪の降るところで、積雪が2メートルを超す豪雪地帯もある。村人は雪との戦いに半年をも費やす。

2. 経済

大蔵村は農村でもあるため、村民たちは農業を主な仕事としている。農作業に従事するのは、年配者たちと農家を継ぐ長男である。農作業を行わない時には、土方や、土木工事などの建設現場で兼業している。酪農業も盛んである。そして、若者は近隣の新庄市へ勤めに行く人も少なくない。

大蔵村では肘折温泉が有名で、807年に発見されたと伝えられている。2007年に開湯1200

⁶ 「子どもの数30年連続減少 人口割合13.2%過去最低」朝日新聞、2011.5.2

⁷ 「子どもの数、30年連続減 最少更新、1693万人」共同通信、2011.5.2

⁸ 1982年に64の村で始めた「フランスで最も美しい村」協会は農山村の美しい景観、文化、環境を守ることによって観光の付加価値を高めようとした。2003年に「世界で最も美しい村」連合が設立された。そして2005年10月に「日本で最も美しい村」連合が立ち上げた。

少子高齢・過疎化における通過儀礼の変遷 —「日本で最も美しい村」山形県最上郡大蔵村を事例として

年祭が行われた。名称の通りに骨折や傷・神経痛、そして内臓の病気などにもよく効くことで人気が集まっている。22軒の旅館を有している肘折温泉の観光業は村の最大な収入源となっているが、以下の表のように日本経済の衰退に伴って観光客数は年々減っている状態である。

観光客数（肘折温泉郷） 単位：人

平成12年度	202,400
平成14年度	192,900
平成16年度	174,900
平成18年度	156,800
平成20年度	139,500
平成21年度	111,314

資料：山形県観光客数調査、大蔵村構造改革特別区域計画書により⁹

3. 少子高齢・過疎化の現状

山形県の2010年の国勢調査速報によると「2005年の国勢調査と比べて大蔵村の人口の減少率は10.98%で山形県内35市町村の中で最も高い数値である」。¹⁰そして、少子高齢化が急速に進んでおり、2009年3月には134年の歴史を持つ沼台小中学校と肘折小中学校が閉校した。現在、大蔵村には、大蔵小学校と大蔵中学校の各1校しかない。「大蔵村勢要覧 昭和32年」によると昭和31年5月には、大蔵村には、小中学校及び分校は14校もあった。高齢化について、2008年10月1日現在、高齢化率は31.2%に達し、日本全国平均の22.1%及び山形県平均の26.8%よりも高い。¹¹以下の表のように1945年に大蔵村の人口は9,566名も有したが、1945年から2010年までに65年の間に大蔵村の人口は約61%減少した。深刻な少子高齢・過疎化が続いている現状である。

年 度	1945	1955	1965	1975	1985	1995	2005	2010
世帯数	1,478	1,509	1,290	1,172	1,135	1,096	1,085	1,045
人 口	9,566	9,044	6,897	5,598	5,203	4,863	4,226	3,762

(大蔵村勢要覧昭和27年、2005,2010国勢調査、『広報 おおくら』により)

⁹ 大蔵村役場(2010)『村勢要覧 平成21年度版 資料編 大蔵村』

「構造改革特別区域計画」大蔵村役場、2010.11.pp.4.

¹⁰ 「山形市、戦後初の人口減少、増加維持は東根市のみ」河北新報社 朝刊、2010.12.25.

¹¹ 総務省「平成20年人口推計」、山形県「山形県の人口と世帯数」(平成20年10月1日現在)

三. 大蔵村における通過儀礼の変遷

1. 妊娠・出産に関する儀礼

- a. **帶祝い**：安産と子どもの成長を願うために戌の日に腹帯が巻かれたが、現在では、ほとんど新庄の病院で出産するようになったので、帶祝は行われなくなった。病院から村に戻ってくると各集落の氏神神社へ参りに行く。新庄の戸沢神社か鳥越神社へ参りに行く人もいる。また、清水と沼の台では、4月12日に妊婦は自分のうちで産神山神社（本山は宮城県小牛田町の小牛田産神山神社）の掛け軸に参拝して赤飯でお祝いを行う。そして戌の日になる前に直接に小牛田山神社（宮城）へ安産祈願をしに行く人もいる。神主から腹帯、お供えのお米、お札、お酒をもらって戌の日に腹帯を巻く。
- b. **出産祝い**：「おぼこなし見舞い」と言って出産祝い金、お菓子、果物などで祝いを行う。現在では、身内ののみで行う場合が多い。

2. 幼年期と年齢に関する儀礼

- a. **お七夜、命名式**：子ども生後7日目に命名を書き、神棚の下に貼って飾る。仲人と実家の両親を呼んで祝う人もいる。現在では、子どもが生まれてから2週間以内に命名を役場に届けを出すのみで命名式はほとんど行われなくなった。
- b. **お宮参り**：男女とも生後33日目頃に各集落の氏神へ参りに行く。肘折では、神明神社へ参りに行く。兼業の神主が一人しかいないので、新庄の神社へ行って神主に祈祷してもらう人もいる。冬に子どもが生まれた場合は、大雪の関係でお宮参りの時間を延期することもある。この風習は今でも続いている。
- c. **お食い初め**：女の子は生後105日目で男の子は生後110日目で尾頭付きの魚、ご飯、お汁、昆布などの山菜料理を使って子どもに食べる真似をさせる。子どもの健やかな成長及び一生涯食べ物に困らないようにと願いを込める儀式である。現在でも広く行われている。
- d. **初節句**：旧暦で行われる。雛祭りは4月3日で端午の節句は6月5日に行う。雛祭りでは、子どもたちが「お雛見」に各家を回ってお菓子をもらうという習慣がまだ残っている。嫁の実家から贈られた雛人形を飾る。また、甘酒、くじら餅、ご飯、味噌汁、魚、お菓子、お花などを供えて祝いを行う。端午の節句では、嫁の実家が買ってくれた5月人形を飾って鯉のぼりをあげる。また、厄除けのためにヨモギと菖蒲を繋いで軒先に差したり、菖蒲を風呂に入れたり、菖蒲湯を作る。そして笹巻きで作った「たら餅」を供える。また、菖蒲、しおで（牛尾菜）、蓬を束にして耳にあて「いいことを聞いて、悪いことを聞かない」と祈願する人もいる。

少子高齢・過疎化における通過儀礼の変遷
—「日本で最も美しい村」山形県最上郡大蔵村を事例として

- e. **七五三**：神社への参拝と家族写真を撮るのは、風習であったが、現在では、何も行わない家庭が多い。
- f. **初誕生**：「たつたら餅」と言う。誕生日前に子どもが歩けるとおめでたいことで子どもに一升餅を背負わせて歩かせる。そしてわざと転ばせる。足と腰の丈夫や一生に食べ物に困らないように祈る。この風習は大蔵村のみではなく現在、全国各地でも広く行っている。
- g. **成人式**：戦国時代から近世まで庶民の間に大蔵村におけるイニシエーション儀礼は登山型であった。男子が15歳になるとまず1~3週間ぐらい別火別行の生活で心身を清めるための行屋にこもってから冠をつけて白衣、手甲脚絆、草履の姿で出羽三山へ参りに行くという「初山がけ」の試練儀式を行った。¹²明治4年の神仏分離令や山参りを支えた藩政権の解体などが原因で出羽三山の信仰が衰退して「初山がけ」も行われなくなった。大蔵村広報の記録によると戦後、政府により成人の日が正式に設定された1949年に大蔵村役場の主催で初めて成人式が行なわれた。1949年に第1回の成人式以来2010年10月現在まで62回の成人式が行なわれてきた。2010年の成人式は8月14日に中央公民館で行った。式次第は以下の通りである。
1. 開式のことば 2. 国歌斉唱 3. 新成人者紹介 4. 式辞 5. 祝辞 6. 来賓紹介 7. 祝電披露 8. 記念品贈呈 9. 20才に贈るメッセージ 10. 誓いのことば 11. 閉式のことば 12. 記念撮影
- h. **厄払い**：毎年2月3日の「星祭り」に男の子は25才、42才、61才、女の子は19才、33才が日秀寺（日蓮宗）で住職に祈祷してもらって厄祓い儀式を行う。昔は、42才と61才の男女が同級会を兼ねて祈願旅行を行われたが、今では、少なくなった。
- i. **長寿の祝い**：88才の米寿祝いのみ身内で祝いを行う。9月の第2日曜日に敬老会として行政がそれぞれの集落で77才の喜寿、88才の米寿、99才の白寿の人を祝う。町役場から大蔵村の「長寿番付表（90才以上の方）」が作られて毎年に『広報 おおくら』10月号に掲載される。
3. 結婚儀礼：

a. **昔の結婚式について**

大蔵村では、結婚式を「むかさり」と呼んでいる。昔の結婚式は、日本の多くの地方と同じようにお見合いであった。仲人が縁談を行って、両方の両親が賛成すれば縁談が成り立った。それまではこれから結婚する二人は話したことはないし、会ったこともないケースが多かった。二人の縁談が整ったら、「昆布もらい」が行われることにより、

¹² 『大蔵村史』大蔵村史編纂委員会、昭和49.3.pp.173~pp.180.

形式上ではもう婚約したということになる。その後、結納が行われる。結納品には、縁起を担ぐために、食べ物の名前を当て字にし、たとえば、スルメを寿留米（長寿の象徴）と、昆布を子生婦（子を産婦人に通じて子孫繁栄の象徴）、アワビを熨斗（干したアワビを伸ばすと長く伸びることから、長寿や発展の象徴）と、酒を家内喜多留（家の内に喜びを多く留める）と書くのが一般的である。¹³

結納金は嫁をもらう側から出す。普通は給料の2倍～3倍である。たとえば、昭和34年頃、初任給は約13,000円だった時に、結納金は2万円ぐらいであった。昭和40年頃に自宅での結婚式は最後になった。

結婚の成立について、まず嫁を送り出すために御膳を作つて、別れの儀式を行う。嫁を受ける側も迎える準備を行う。嫁の家では、お酒を飲んで、娘と別れる。他方、婿の家では「座頭」¹⁴という一番近い親戚と一緒に嫁を迎えて行く。迎えに行く時には簾を担ぐ人とお酒を担ぐ人を連れて一緒に行く（その人たちは両親が揃っているうちの子どもでなければならない）。一方、嫁を逃がさないように嫁について行く人たちを「嫁付け」と言って、嫁と一緒に並んで、婿のうちに行く。男の提灯持ちが行列の先頭に立つて仲人と座頭も行列と一緒に歩いて行く。

道端には大勢の村民たちが縄を張って、通りかかった行列を止まらせる。お酒を飲ませたり、謡曲や歌を歌わせたりして、はじめて行列を通ることができる。また、村民たちにはごちそう（豆、煮しめ、お酒）を配る風習があった。

そして、婿のうちに着いたら、花嫁は土間まで入つてから、座頭に負んぶしてもらい、台所から家に入る。ほかの人たちはみんな玄関から家に入る。これは、これからの生活における台所に関する仕事は花嫁の責任になるということを意味する。

家に入つたら、まず仏壇に参る。嫁と婿が先祖に挨拶してから床の間のある部屋に移動する。そこで新郎新婦二人が並んで座る。

その次は、三三九度である。巫女がお酒を注ぎ、雄蝶と雌蝶と呼ばれる親戚の5、6歳くらいの小さな子どもを二人ずつ立て、三三九度¹⁵の杯を交わす。結婚式は両親とそして、兄弟などの親しい親戚が出席する。ほかの人たちは別の部屋で待っていた。

三三九度が終わつたら、披露宴に移る。御膳が座敷にずらりと並び、お膳が揃つて、みんなが座ると、まず挨拶をし、新郎新婦が入つてくる。座頭と仲人の挨拶後、皆で乾杯してお祝いの歌を歌う。新郎、新婦が入場した時に『長持』をまず、歌い、『高砂』、『鶴

¹³ 潘兆祥『食文化の理論と実証研究——日本人の肉食観と魚食観を中心に』pp.303.

¹⁴ 花嫁を迎える行列に一番先に歩いている人のこと

¹⁵ 角樽には酒9合を入れて、新郎新婦に交わしながら飲むことを指す。「一生苦を合わす」意味で一升9合を入れる場合もあったという。

少子高齢・過疎化における通過儀礼の変遷 —「日本で最も美しい村」山形県最上郡大蔵村を事例として

『亀』と『桜』という縁起の良い三謡曲を歌ってから、「おめでとうございます」と言って、あとは飲み明かす。酔ぱらった客たちはそのまま泊まり込む。

結婚後の翌朝に花嫁と花婿がお餅を作る。それは夫婦二人の初めての共同作業で、「くっつき餅」と言って二人が別れないようにという意味が込められている。それを泊まった人たちにも、お家のの人にも、食べさせる。普通、客は朝ごはんを食べたら、適当な時間に帰る。

二日目の午後三時から、結婚式の準備に手伝ってもらった人々を招いて、「びんしゅ(三番座)」を始める。それは、本膳に呼ばれなかった人たちである。例えば、隣近所に嫁いできている人たちである。三日目は、花婿の友達を招いて、ごちそうを振舞う。

b. 現在の大蔵村の結婚式

大蔵村における現在の結婚式は、ほとんど自宅で行われなくなった。通常は新庄市の結婚式場で行なっている。また、今結婚式を挙げない人も少なくない。ただ、家の長男を後継ぎとし、一般的に結婚式を行っている。

現在、新庄市の結婚式場における結婚式の流れは以下の通りである。

まず「メモリアルプラザ大地会館」という式場における結婚式であるが、そこで神前結婚式とチャペル結婚式の二つのタイプで行っている。

神前結婚式： ①新郎新婦がすべてのゲストに見守られて、入場 ②誓いの言葉齊唱 ③指輪交換 ④結婚証明書署名 ⑤立会人署名 ⑥証明書披露 ⑦お二人へ花束贈呈 ⑧新郎新婦退場 ⑨ゲストよりひと足先に披露宴会場へ行って、あとでゲストが揃ったら披露宴に移るという流れである。普通は披露宴の後に二次会や、三次会まで行う人もいる。

チャペル結婚式： ①ゲスト着席 ②新婦が父と入場 ③新婦父から新郎へ ④新郎新婦がメインへ行って、紹介してもらう ⑤誓いの言葉齊唱 ⑥リングの交換 ⑦誓いのキス ⑧結婚証明書のサイン ⑨立会人のサイン ⑩誓いの言葉＆結婚証明書披露 ⑪ゲストたちに確認し、賛同の拍手をもらう ⑫終わったら新郎新婦が退席し、ブーケブルズを行う。その後の披露宴などは神前結婚式と同様である。

他「ザリヴィントン」という結婚式場でも調査を行ったが、結婚式の内容は「メモリアルプラザ大地会館」とはほとんど変わらない。しかし、この二つの結婚式場のどちらも結婚件数が減っていることから、近年来、結婚する人が減少していることが伺われる。

4. 葬送儀礼

昔、大蔵村は城下町だったので、8か所の寺があったが、檀家の減少により、現在、専任の住職は4か所しかない。大蔵村で約200軒の檀家を持ち、一番大きな寺である龍泉院（曹洞宗）の葬式を事例として取り上げたい。肘折集落の住民の多くは龍泉院で葬式が行われている。新庄の病院で亡くなるのが、ほとんどである。亡くなつてから自宅まで運んでもらう。電話で親類などに不幸を知らせるのは、普通であるが、契約講（組）の場合は、2人1組で他組員に知らせる。昔、土葬の時代に契約組から「だみ（世話方）」を出してもらったが、現在では、葬儀業者に依頼することになったので、「だみ」が必要ないところがほとんどである。葬式の順序については以下のとおりである。

まず、末期の水では、葬儀業者が主導で出し綿を水に付けて、身内ののみで死者の唇を濡らす。枕飾りについて線香、蠟燭、はや団子、菊、大盛りご飯に箸を立てる、鈴、逆さ屏風などである。遺体は北枕にする。死人装束は、葬儀業者が草鞋、杖、経足袋など一セットで持つて来る。紙で作られた三角の天冠を親戚、身内及び亡くなつた人の額に付ける。そして通夜の時に入棺儀礼を行う。棺を祭壇の前に安置して、入棺封印をしてから僧侶がお経を唱える。地元の人々が念仏をあげる。

肘折では、火葬を行つてから葬儀を行う。葬式の時に地元の人々が料理を作つて参列者に振る舞う。近い親戚の旦那が葬儀員長を務める。葬列は以下のようなであるが、昔のような野辺送りがなくなった。

棺側（本家人）、遺骨（身内、親族）、写真（身内）、位牌（喪主）、枕飯（親族）、鉢、松明（親族）、団子（親族）、四花（親族）、灯明（親族）、香炉（親族）、菓子（親族）、果物（親族）、一本花（親族）、茶水（親族）、茶碗（親族）、白蓮（親族）、線香（外参列者一同）

香典について約100世帯がそれぞれは香典を遺族へ持つて行く。一般的に3千円か5千円で親戚だと1万円である。村の人に対しては香典返しをしない。肘折では、葬儀が終わつてから、すぐ納骨を行う。夜には、地元の人々が最上三十三観音のご詠歌を歌う。参列者は、体に塩を振つて水で手を洗つてから家に入る。僧侶は出たところにお札を貼つてお経を唱える。

戒名について地元では、ほとんど居士、大姉を付けられた。院号が付けられたのは、大きな旅館などの主人とおかみである。また、法要について四十九日の法要を葬儀の当日に終わらせることが多い。墓について肘折では、公営墓地と金山墓地がある。他地区では、それぞれ集落墓地がある。葬式に関する迷信、言い習わしとタブーはほとんどな

¹⁶ 肘折では、肘折契約講、横町契約組、オンツア組合、川向契約組、親睦契約組という五つ伝統的な契約講がある。

少子高齢・過疎化における通過儀礼の変遷 —「日本で最も美しい村」山形県最上郡大蔵村を事例として

い。友引のみ葬儀を行わない。

五. 考察

現地調査結果により、大蔵村における通過儀礼には変化の兆しが見えてきた。かつて村の人々が一緒に祝った出産祝い、お七夜、お食い始め、誕生祝いなど子どもに関する儀式は身内のみで行う傾向が強くなってきた。また、檀家と氏子数の減少により寺、社の運営が困難になる。従って、安産、宮参り、七五三、結婚式、厄払い、葬式など住職と神主が深く関わる通過儀礼も変遷を余儀なくされた。この調査結果を踏まえて以下のような考察をした。

1. 妊娠・出産儀礼及び子どもに関する儀礼

大蔵村肘折保育園の子ども保護者を中心に20名の村民にアンケートを行った。14枚を回収した。以下のようにアンケート調査が示した結果では、「お食い初め」と「お宮参り」は一番よく行われた。一方、「お七夜、命名式」について半分以上的人人が行わなかった。

大蔵村における通過儀礼のアンケート調査

項目	帶祝い	誕生祝	お七夜 命名式	お宮参り	お食い 初 め	初節句 雛祭り	初節句 端午	七五三	初誕生
行った	9	8	6	12	13	10	8	8	10
行わなかった	5	6	8	2	1	4	6	6	4

子どもが成長して離乳食を食べ始める頃に「お食い初め」によって祖先に報告を行う。そして「お宮参り」は、子どもが氏神を祀っている神社へ参りに行くことによって地域の一員として認めてもらう儀式である。両儀式ともに村の生活共同体として欠かせないものであることを改めて明確になった。

一方、かつて仲人と両家の両親が集まって「お七夜」を祝うのが一般的な風習であったが、現在では、仲人はほとんど立てなくなったり、親戚の付き合いも薄くなってきた。また、自宅出産から病院出産への変化で産婦が帰宅したのは、産後の七日目である。そして役場へ名前届け法の改正などの原因によって「お七夜」は簡略されて行わない人も増えてきたと考えられる。

その他、厄払いと子どもの成長を願うという初節句について大蔵村では、「お雛見」などの儀式が今だに残っているが、今後、深刻な少子化を進むにつれて「お雛見」など子どもに関わる儀式が薄れてゆくではないかと懸念される。

2. 成人儀式

かつて「成人式」は、新成人に「初山がけ」のように厳しい試練を与えて修業させた。その結果によって「一人前」の能力が地域社会から認められる。たが、現在では、行政側が主催する成人式は、修業なしの20歳という区切りのセレモニーにすぎない。成人式の開催内容及び意義が問われる中、村の少子高齢・過疎化に伴って成人儀式に参加者数が年々減っている傾向がある。特に、昭和34年(1959年)に大蔵鉱山及び昭和36年(1961年)に永松鉱山の閉山とともに中学卒業のほとんどが県外就職となり人口が急激に減少し、若者も少なくなった。しかも、村外在住者数は村内在住者数よりも2倍以上もいるので、若者の村外流出が村の過疎化に拍車をかけることになる。将来、成人儀式の開催も困難になると予測される。

大蔵村における成人式の参加者数の推移¹⁷

年	1960	1965	1971	1975	1982	1985	1990	1995
人 数	131	74	80	88	74	60	45	41

年	1996	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010
人 数	40	46	54	52	51	53	43	44
村内在住	17	16	16	23	18	17	9	12
村外在住	14	28	33	29	33	36	34	32
無回答	9	2	5	0	0	0	0	0

3. 厄払い儀礼と長寿祝いに関する儀礼

2008年に読売新聞が行った気にするものに関する年間連続調査「日本人」では、「厄年を気にする」と回答した人は40.8%で「葬式帰りのお清め」の27.3%、「4という数字」の14.8%、「テレビや雑誌などの占い」の10.9%よりも高かった。¹⁸現代社会における通過儀礼はかなり希薄になってきているが厄年に関する忌み嫌う伝統儀礼は相変わらず根強く残っていることが伺われる。厄年儀礼は日本人の深い心に無意識的に強く潜んでいるとも言える。日本全国に普及している厄払い儀式は地域によって厄年の年齢は多少異なるが、大蔵村では、厄払いの年齢は、男性は25才、42才、61才で女性は19才、33才である。愛知県稻沢市国府の宮裸祭り、三重県松阪市中町の岡寺初午大祭、名古屋市中村区岩塙町のきねこさ祭りなどのような伝統的な厄年儀礼を盛大に行って地域活性化を図る自治体もかなりあるが、大蔵村の厄年儀礼は神主の厄払いのみである。

¹⁷ 大蔵村役場『広報 おおくら』NO. 1 ~613.

¹⁸ 「日本人」読売新聞 朝刊、2008. 5.30.

少子高齢・過疎化における通過儀礼の変遷 —「日本で最も美しい村」山形県最上郡大蔵村を事例として

一方、村では、長寿祝いについて「米寿」のみ身内で行われている。60歳の還暦は長寿祝いではなく、厄年として見なされている。長寿者に対して村が独自に長寿祝いを設けたら、良いと考えられる。特に高齢化率が進むなかで、年長者を仰ぐと共に新しい通過儀礼を通じて村の活性化にも繋がると思われる。

4. 結婚儀礼

結婚式は通過儀礼の中で重要な儀礼として、昔から個人や、社会に大事にされてきた。結婚する二人が親族や、村の人々に認めてもらって新たな人生の節目に入る。新しい家庭が次々と誕生してくれれば、村は存続されるし、家族の発展と繁栄もできる。

しかし、時代の流れに従い、通過儀礼には大きな変化がでてきた。結婚式もその中の一つとして免れることができず、いろいろな変化が起こっている。昔のようにお見合い、結納、結婚式、披露宴といった手順を守って挙げる結婚式はだんだん少なくなっているどころか、結婚式をしない、電撃婚、旅行結婚などというような新型結婚も次々と登場してきている。それだけでなく、結婚しない、結婚しても子供を産まないケースも増え続けている。

大蔵村の結婚式を取り上げてみると、まず、仲人に依頼せず、結婚式場で行うのは一般的になった。結婚式における「座頭」、「嫁付け」、「三三九度」、「くっつき餅」、「びんしゅ」などと言った伝統的な風習が消えていった。「謡曲」のみが今でも結婚式場で行われている。また、昔の結婚式は自宅で行うのに対して、今は結婚業者に頼み、結婚式場で行うことになった。そして儀式の中に三三九度の代わりに、指輪交換が行われるようになった。結婚式はチャペルで行われることも多くなった。結婚式は西洋化になっていくことが伺われる。結婚業者の登場により結婚式は、全国各地にどこでも見られる「均一性」になってきた。それは、村の少子高齢・過疎化の進行及び地域社会共同体の崩壊と繋がっているのではないかと考えられる。伝統儀式が消えていくなかで現存している「謡曲」のような風習をどうやって保存し、受け継いでいくのか、今後の課題である。

5. 葬送儀礼に関する儀礼

現在では、全国各地の葬式はほとんど葬儀業者に依頼する形になってきたが、大蔵村では、葬儀道具などの一部のみ葬儀業者に依頼している。葬式の場所は葬式会館ではなく、今でもほとんど自宅で行われている。また、葬式の振る舞いは、村民たちの互いに助け合って行っていることや香典の行い方などから村における相互扶助の精神の強さが伺われる。一方、肘折では、旅館業が中心で宿泊客を相手にするため、ゆっくりと葬儀を行う時間がないため、遺体を火葬してから葬式を行う。そして葬儀の当日に四十九日の法要を行うなどから、葬式の簡略化が見られる。高齢・過疎化が進んでいくに伴って葬式など長年が続いてきた住民同

士の助け合いが更に困難になっていくと思われる。今後、葬式の簡略化が更に進み、葬儀業者への依頼度がもっと高くなっていくと予想される。

おわりに

今の大蔵村では、昔から伝わってきた独特な風習の一部が現代社会における日本共通の通過儀礼のやり方と共に存していることが調査結果から分かった。最も分りやすいのは、葬式である。葬式は一部のみ葬儀業者に依頼する。昔のように葬式は、自宅で行う村民が多いというのも伝統文化の伝承にとっては大事であると思われる。

2009年に大蔵村肘折を舞台に村の少子高齢・過疎化が引き起こした社会問題のドキュメンタリー映画「湯の里ひじおり」（監督：渡辺智史）が封切りされた。この山形発の湯治映画は日本各地から注目を集めた。少子高齢・過疎化により村の経済が衰退して学校が統合されるなどさまざまな面で影響を及ぼしている。その中、日本の古き良きな通過儀礼も少なからず打撃を受けた。実際、1986年に大蔵村の役場はそれらの問題を解決にあたって、行政主導型の国際結婚をいち早く行った。アジアからの「花嫁」の先駆地として全国から注目を集めだが、その後、経済格差に基づいた「人身売買」という国内外から厳しい批判によって行政主導型の国際結婚は打ち切られた。注目の「国際結婚」から27年経った現在の大蔵村は依然深刻な少子・高齢・過疎化に悩まされながら、なかなか打つ手がない現状である。

大蔵村における通過儀礼の変遷は日本全国で起こっていることの一例にすぎない。地域別に多少違いが出てくるだろうが、いずれもその地方における少子高齢・過疎化を反映するとと思われる。今まで筆者は日本全国の各地で通過儀礼に関するアンケート調査を行ってきた。その結果は、通過儀礼を村に残す一番の方法として「村に人が残ること、村民を増やすこと、若者が村に残ること」といはずれも少子高齢・過疎化に関する答えであった。大蔵村は初心に戻ってかつて注目された「花嫁」対策のように改めて深刻な少子高齢・過疎化対策に積極的に取り組まなければならないと思われる。大蔵村の再生、引いては、日本の再生は考えさせられる。

調査時間：

2009.10.10－11, 2010.9.6－8, 2011.5.26－29

謝辞

今回の調査に協力して頂いた大蔵村の方々に心より感謝申し上げます。

少子高齢・過疎化における通過儀礼の変遷 —「日本で最も美しい村」山形県最上郡大蔵村を事例として

協力者：

矢口仁（大蔵村教育委員会教育長）、中村美智子（元大蔵村教育委員会教育長）、滝沢恒彦（大蔵村総務課課長補佐兼政策推進係長）、熊谷勝保（大蔵村文化財保護委員）、高山衛（大蔵村文化財保護委員）、柿崎繁雄（株式会社 肘折ホテル会長）、木村裕吉（木村屋旅館 代表）、小林純子（メモリアルプラザ大地会館営業）、高山久美（ザリヴィントンマレージャー）、大友義助（民俗学者）、中島俊子（大蔵村農業者）、中島信子（大蔵村農業者）、中島安子（大蔵村農業者）、三原美喜子（旅館職員）、大山真照（龍泉院住職）、村松幸一（肘折住民）、大平富太郎（肘折住民）、甲州正三（肘折住民）

参考文献：

- 井之口章次（1978）『人生儀礼』、有精堂出版。
- 目黒依子、西岡八郎（2004）『少子化のジェンダー分析』、勁草書房。
- 農山漁村文化協会（2006）『大蔵村史』、大蔵村史編纂委員会。
- 潘兆祥（2002）『食文化の理論と実証研究——日本人の肉食観と魚食観を中心に』
- 佐伯剛正（2008）『日本で最も美しい村』、岩波書店。
- M. デエリアーデ、堀一郎訳(1971)『生と再生』東京大学出版会。
- 石井研士(2005)『日本人の一年と一生』株式会社 春秋社。
- 大蔵村役場(2010)『村勢要覧 平成21年度版 資料編 大蔵村』。
- 大蔵村役場(1952)『大蔵村勢要覧昭和27年』。
- 大蔵村役場(1957)『大蔵村勢要覧昭和32年』。
- 大蔵村史編纂委員会(1974)『大蔵村史』大蔵村。
- 大蔵村役場企画室(1989)『広報 おおくら 緩刷版』大蔵村役場。
- 倉石あつ子、小松和彦、宮田登（2000）『人生儀礼事典』小学館。
- 小此木啓吾(1978)『モラトリアム人間の時代』中央公論社。
- 芳賀登(1991)『成人式と通過儀礼—その民俗と歴史』雄山閣出版社。
- 永田久(1989)『年中行事を「科学」する』日本経済新聞社。
- 八木透(2001)『日本の通過儀礼』思文閣出版。
- 赤坂憲雄、森繁哉(2000)『別冊東北学』VOL.1、東北芸術工科大学 東北文化研究センター、作品社。
- 赤坂憲雄、森繁哉(2002)『別冊東北学』VOL.3、東北芸術工科大学 東北文化研究センター、作品社。
- 尤銘煌(2011)「山形県最上郡大蔵村における成人式の変遷について」『比較文化』日本比較文化学会、p.53-62。

The Transition of Rites of Passage in Depopulating and Aging Society —The Case of the Most Beautiful Village of Ohkura, Mogami Country, Yamagata Prefecture, Japan

Yu, Ming-Hwang
Miao, Ze-Yuan

Abstract:

Ohkura village is a typical beautiful mountain village in Yamagata Prefecture, Japan. It's could be said that the average culture and figure of Japan can be found by examining the Ohkura village.

Since the depopulation and aging of this society is a serious concern, the way of rites of passage in Ohkura village had been transformed. For example, many temples and shrines were forced to shutdown causing the number of believers and supporters to greatly decline. Many traditional ceremonies, such as the ceremony of First-visit to shrine, the Seven-Five-Three year old ceremony, the funeral ceremony and so on have steadily declined. Also, the shortage of bride candidates made the number of wedding ceremonies decrease. The mutual help given to each other used to be the essential fundament to maintain the rites of passage. Now, it has become difficult due to depopulation.

Under the background of this society, this paper will discuss the changing procedures of the rites of passage in Ohkura Village based on the results of a field trip. In addition, social problems also will be examined and discussed.